

## 補足解説

■数値予報モデルが精緻化して予測精度が向上していますが、目の前に存在する実際の雲をモデルの中に完全に再現できないように、モデルの中の現象は完璧なものではありません。モデルの解像度が細くなるにつれ、表現される現象が非常にリアルに見えてきますが、実際には誤差が含まれることに気をつける必要があります。

■例えば雨量予想結果をある格子点の 1 時間ごとの時系列にしてみると、同じ格子点の実況値と比較すると非常に誤差が大きく、このような使い方をするとかえって信頼を損ねることになりかねません。モデルの予測値は、位置、時間、強度（量）の誤差を十分に考慮した使い方をする必要があります。

■数値予報モデルは、降水の分布や気温などの気象要素だけでなく、例えば関東平野の内陸に冷氣層が形成され、南からの暖湿流がぶつかって沿岸前線を形成する様子や、関東の東海上から下層の寒気が流入する様子など、予報の手掛かりとなる大気の三次元のふるまいを表現することも可能です。モデルの結果を参考に現象の構造への理解を深めるとともに、日頃からモデルの特性を確認しておくことで、よりの確な気象予測につなげることができます。